

# 石原元都知事の右腕が激白！

# 『「水面下」の内幕を全部話しましょう』

政治ジャーナリスト 鈴木哲夫



「屈辱を晴らす」と息巻く石原氏だが（東京都）

## 「返り血浴ひるかもしない」

2月に入り石原慎太郎元東京都知事が積極的に発言し始めた。築地市場の豊洲新市場への移転問題について週刊誌で当時の様子を語り、記者会見や連日自宅を取り囲むマスコミ関係者らに言葉を発した。

「逃げているとか隠れているとか言われた屈辱を晴らしたい」

石原氏はそう語るが、そもそも「屈辱」といった話でもないだろう。豊洲への移転を巡って、不透明な土地取得交渉や、安全対策の盛り土が充分に行なわれていなかつたことなど、

に免れない。説明責任を果たすのは、「晴らす」のではなく当たり前の話ではないのか。

石原氏が発言し始めた理由について、石原氏に近い関係者は「石原さんの精神状態は、感情的には『いい加減して欲しい』と沸点に来ている。小池百合子知事に標的にされ、マスコミにも責任を散々書かれ、連日自宅前に報道陣が詰めかけ、一步玄関を出ると質問攻めの毎日が続いている。『俺にも言い分はある』とそういうことでしょう」だが一方で、発言することについて心配する面がむしろ大きいという。

「喋つて済むかと言ふと全く逆で、心配する面がむしろ大きい」という。恐らく弁護士らと見内容を精査して臨んだとしても、自分は悪くないと主張すれば逆に世論は批判的になる。さらに喋ることで次の疑惑が沸く。じゃあ、次は百条委員会でとなると、話に矛盾が生じて偽証罪などにもつながる。喋ることで議院に百条委員会設置のプレッシャーをかけたというのが真相だ。

「作りたくないが、仕方ないところまで来た」

そう話すのは自民党のベテラン都議だ。百条委員会というのは、その「百条」の名のとおり、地方自治法100条に基づいて地方議会が設置

見。しかし、中身は「自分ひとりの責任ではない」と逃げの印象を残しているのか。

周辺の「墓穴を掘ってしまう」という心配は的中してしまった。こうした石原氏の高ぶりは「会見をやる」「やらない」「議会の喚問などどこへでも出る」と連日の発言となり、そんな石原氏がマスコミが取り組んで報道し、世論の注目をさらに高めて行くことになってしまった。その結果が、都議会の百条委員会設置だ。

3月22日、都議会の主な4会派が豊洲市場を巡る問題を審議する調査特別委員会、いわゆる百条委員会の設置を提案し可決されたのだが、これは、石原氏が結果的に世論を喚起してしまったために、「議会も百条委員会設置を可決すべき」という声が高まり、議会に百条委員会設置のプレッシャーをかけたというのが真相だ。

「百条」の名のとおり、地方自治法

100条に基づいて地方議会が設置

結局、石原氏は3月3日に記者会

する調査特別委員会。自治体で起きた疑惑などの真相を究明するために設置できる。関係者を呼んで証人喚問し、記録なども提出させるという強制力や調査権限を持つ。さらに、正当な理由のない証言拒否や虚偽の証言をした場合は禁錮刑や罰金刑などの罰則もあり、地方議会では百条委設置は疑惑解明の最大のヤマである。

自民ベテランが続ける。

「うちは豊洲移転を推進した。百条委が進むにつれ返り血を浴びるかもしれない。例えば豊洲の土地契約を最終的に認めた際に、議会の多数派工作をしたのはうちの幹部だ。そんな人まで証人にとったことになるかもしれない。しかし、今都議選運動で選挙区を回ると有権者からの突き上げが凄い。そして自民党の支援者までがこのところの石原さんニュースを見て、きちんと（百条委で）やるべきだと。夏の都議選を考えればやらざるを得なくなつたということだ」

また都議会の公明党も百条委設置には消極的だった。

「百条委は事前の調査など時間も手間もとてもかかり、今は都議選対

応でそれどころではない。それに、百条委でろくに追及ができないといふことになれば、それは逆に批判に変わり都議選には悪影響になつてしまふ。どう転んでも都議選にリスクがあるが、自民党さんと同じように、うちも支援者、特に女性の支援者が百条委徹底的にやれと言うのです」

（公明党都議）

## 「高みの見物」小池氏の自算

スケジュールについては、百条委設置が決まった2月22日にさっそく百条委で話し合われた。設置を主張してきた共産党などは19人の召喚リストを出したが、具体的には決まりず、一旦先送り。その後、石原氏らの喚問など大筋が決まった。

共産党都議団幹部は言う。

「石原氏や副知事として土地交渉に当たった側近の浜渦武生氏などは召喚するのは当然。しかし、自民党などはその他に誰を呼ぶかで自分達にも影響が及ぶことになる。百条委はいつまでにといった期間の制限はありませんが、都議選ぐらいまで引張るようなことになれば、徹底的に追及姿勢を見せるうち（共産党）は有利、自民党や公明党にはマイナ

スになるから、さすがに自民党などはそこまでには百条委を終わらせた。誰をどの範囲でいつまでに呼んでどんな決着とするのかなど、百条委を作つたはいいがどう運営するか、各党、特に自公の思惑は複雑で難しい対応になるでしょう。都民が望んでいるようなすつきりした解明となるかは不透明です」

だが、こうした石原氏や都議会の混乱ぶりを、余裕を持って眺めているのは小池百合子都知事だ。

「屈辱とかそういう問題ではなく、都民はファクトを知りたい」（2月16日記者会見）

「（百条委員会について）これからどのどんなやりとりが行なわれるか見守りたい」（2月22日東京都議会初日ぶら下がり取材）

「（石原氏と会うかどうかについて）議会の方でお聞きになるので、お任せしたい」（同）

豊洲新市場への移転問題で淡々と語っている小池氏。どこかこの問題について「半ば自縛自縛（都議団幹部）と対応の難しさを自状する。小池氏は眺めていればいい。「したたかな

自民党は今後の百条への取り組みについて「半ば自縛自縛（都議団幹部）と対応の難しさを自状する。小池氏は眺めていればいい。「したたかな都議会制覇シナリオ」（前出席小池支持会派幹部）が奏功していると言える。

さて、百条委員会などでの追及もさることながら、このほど、豊洲移

性の再調査で火をつけたのは小池知事だが、ここへ来てついに石原さんや都議会が踊らされる流れになつたつまり、今後小池氏が暫く動かなくとも、都議会に百条委員会ができる、石原氏が答弁次第でさらに火だるまになる可能性もある。また、都議会自民党などの追及が甘かつたら、それは逆に自民党の失点にもなる。小池氏が、対立軸のターゲットとして掲げた都議会自民党のドン・内田茂都議も、豊洲移転承認の議会可決の際に多数派工作をしたとされ、百条委に呼ばれる可能性も出てくる。結局相対的にこの問題に果敢に取り組んでいる小池氏の存在感は強まり、來たる今夏の都議選でも小池氏の「都民ファーストの会」の勝利にもつながるというカラクリだ。

自民党は今後の百条への取り組みについて「半ば自縛自縛（都議団幹部）と対応の難しさを自状する。小池氏は眺めていればいい。「したたかな都議会制覇シナリオ」（前出席小池支持会派幹部）が奏功していると言える。

転問題のキーマンの1人である、石原都政時代の副知事で石原氏の側近中の側近・浜渦武生氏に、当時の様子を単独で聞くことができた。

浜渦氏は、2000年7月～05年6月に副知事を務めたが、築地市場の移転先となつた江東区豊洲地区の東京ガス跡地の土地買収交渉に当たつた。

これまで、マスコミには露出せず、都や議会に出向いて真実を語るとしていたが、「いろんな報道を見ても、関係者が喋っている内容を聞いても、核心に触れていない」として、このままで問題の本質や解決策までも出口を失うと、このほどインタビューに答えてくれた。

最初に整理しておきたいが、豊洲問題は時期的に見ても3段階あると私は思う。第1段階は、都庁内部で移転先として豊洲に絞られた時期で、これは石原氏が知事に就任する前のこと。第2段階は最終的に豊洲に決まり、東京ガスと土地交渉や合意に至つた時期。そして第3段階はその後汚染が発覚しながらも、そのまま最終契約まで進んだ時期。

浜渦氏はこのうちの第2段階の、まさに中心人物だ。

## 「役人では無理。お前がやれ」

Q：浜渦さんが担当するようになつた経緯は？

浜渦：豊洲の東京ガスの跡地に築地市場を移転しようという土地の交渉は、石原知事就任前の1998年頃から始まつていました。都側の担当副知事だったのは福永正通さん。ところが、交渉がうまく行かないということがだつたのです。

浜渦氏は、石原知事が都庁内の幹部や都議会対策などガバナンスのために副知事に登用した。浜渦氏は人事や天下りにも手を突つ込み、大胆な予算の組み換えなどで週2～3度しか登場しない石原氏に代わり都庁を統治した。ただ、その剛腕ぶりについてやり過ぎと批判の声が、特に既得権を守りたい都職員や都議らから上がつた。

浜渦：石原知事と福永さん、それに知事本局の何人か、そこに私も入つて協議した。その結果石原さんが『もう役人では交渉など無理。浜渦お前やれ』と。そこから、土地の交渉を私がやることになつたんです。

Q：東京ガスの跡地が汚染されてい

浜渦：もちろん知つていました。東京ガス自体が、地下は汚れている。ただ数字で具体的にどれだけ汚れて

いるかという話にまではならなかつたのです。当時は、コンクリートを

単なる箱のようなものではなく、がっちりと流し込んで固めて地面を嵩上げするぐらいのことをやつて、そ上の上に建物を建てれば、地下水とは完全に分断できてそれで充分という考えでした。そうした安全対策はオーブンで議論されていたし、皆も納得していました。私は用心に越したことなどない、さらにシートも敷き詰めればいいと言つたぐらいです。

Q：地下水とは分断できたとしても、他に汚染の疑いなど全くない所に移されたのではないか。

浜渦：当時は、豊洲以外にも4つくらいの他の候補地も挙がつていました。でも移転するには条件がありました。40ha規模のまとまつた広さ、交通の便、築地の時の顧客に近い場所、そして海に面していること。それらを満たすのが豊洲だったということは水面下でやりました。

浜渦：水面下というからには売却に難色を示す東京ガスと何かしらの裏取引や、売買代金の上乗せなどもあつたのではないか、という疑惑が、都議会やマスコミの間に広がつたのである。これについて浜渦氏は真相を次のように明かした。

しかし、顧客の面などで築地市場の関係者が反対で、海も離れていると

いうことで、最終的には無理だといふことになりました。

浜鍋：「水面下」という中身を総て話しましよう。東京ガスは再開発計画を経営決定済みだったので、もちろん、豊洲の土地売却に難色を示していました。当たり前ですが、今後交渉するとして、決定事項を蒸し返されるのは株主へ説明も大変だし困るという感じでした。そこで、むしろ東京ガス側が株主総会対策なども考えて、『水面下』での交渉を望んだのです。前任の交渉担当の福永副知事（当時）の時からこの『水面下』という言葉を使つようになっていたんです。

浜鍋：具体的には何があつたのか。浜鍋：副知事に就任して10月に東京ガスの本社に行きました。向こうはズラリと役員が並んでいて、私はの中の誰が実質的な決定権を持つて、交渉の相手なんだろうかと思いましたね。その後、その中の1人のE氏に力があるということが分かりました。私がまずやつたのは、去年「くなられた自民党の佐藤信一議員。通産大臣や運輸大臣もされて、私は選挙も手伝つたり親しかつたのです。

その佐藤さんの奥様が東京ガスの社長のお嬢さんだつた」ともあって、私は佐藤さんに、東京ガスにお願いしてほしいと頼みました。その後東京ガスの幹部と一緒に現地に視察に行つたんですが、その時に「公共性」という点では御社も東京都も同じ。ここは協力してくれないか」と訴えて、東京ガス側もそこまで言うなら仕方ないという流れになつたのです。その場で現場を見ながら決めたのが、お金の分担だつたんです。

当時、東京ガスは自身の予算で現場の護岸工事を約1000億円かけ実施していたが、浜鍋氏はそれを都が引き受け、代わりに汚染対策は総て東京ガスが行ない綺麗にするという費用分担をして、土地の売買契約を結ぶという条件を提示。同社も株主などを納得させられる条件と判断したのだった。

浜鍋：こうやって、2001年2月に覚書（7月に基本合意に至りました。浜鍋氏は言つた。佐藤さんへの働きかけにしても、費用分担にしても、株主対策など東京ガス側が民間企業として慎重な手順が必要だった。これが「水面下」の総てです。やましいことは全くありません。

こうして基本合意したところで土地交渉は浜鍋氏の手からは離れ、後はストップするのが当たり前。つまりそこには何かが動いたということ。早く豊洲に移したい事情があったのか。どんな政治判断があつたのか。そして誰かがその流れを作つた。私が辞めた後は、知事本局がしっかり民党により、議会介入問題をきっかけにして百条委員会にかけられ副知事辞任に追い込まれた。

豊洲問題に、再び不可解な動きが始めたのは、浜鍋氏が都庁を去つたその後である。2008年、都の専門家会議が豊洲の東京ガス跡地を調査したところ、基準値の4万3000倍のベンゼンが検出されたのだ。ここからがまさに第3段階。東京ガスは、すでに汚染対策は講じたと主張。こうした中で都はいつの間にかこの汚染対策費を捻出することに成功して、2011年に正式に売買契約を済ませたのだ。

実は第1段階の証言者が最近になって出てきた。石原氏が知事に就任した1999年から2年間、中央卸売市場長を務めていた大矢實氏が、「面積やアクセスなど）豊洲に移転するしかない」と最初は私が決めた」と一部メディアに語つたのだ。大矢氏は「副知事や知事に上げて、知事の決裁をもらつた。（会議で）ベンゼンが出るだろうって話が確か出たが、それは封じ込めて充分対応できる」という話だつた」としている。

第一段階の大矢氏の証言、そして第2段階の浜鍋氏の独白。豊洲問題はようやく全貌へ後一歩だ。今後百条委員会で第3段階の関係者への徹底した事情聴取などで、問題は全容解明へ大きく前へ進むことが期待される。